

機関番号：24506

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008年度～2010年度

課題番号：20330190

研究課題名(和文) 学校教師の力量形成を志向した授業研究の方法論に関する研究

研究課題名(英文) Methodological issues on lesson studies toward teacher development at schools

研究代表者 藤原 顕

(兵庫県立大学・看護学部・教授)

研究者番号：60261369

研究成果の概要(和文)：教師の力量形成を志向した校内研修としての授業研究デザインは、子どもの学びという授業研究の主題、参加者に促されるべきメンタリング的、コ・コーチング的な関係性、そこでの意識変容としての授業観の編み直しという諸観点に配慮することが求められる。その際、子どもの学びという主題については教養志向の学び観、子ども＝自律的な自己評価者という観点と、参加者の関係性については分散型リーダーシップや協働システムという観点、役割取得の相互交換という観点と、意識変容としての授業観の編み直しについては、教師が得る発見的認識という観点、自生的授業研究への自覚という観点と、各々関連付けて理解する必要がある。

研究成果の概要(英文)：In designing lesson studies toward teacher development at schools, we can be conscious of three factors, that is, a subject of understanding pupils' learning, mentor-mentee, or co-coaching relationships between teachers, and a reconstruction of teachers' views of teaching as perspective transformation. It is necessary for us to apprehend the subject in connection with culture-oriented learning, and a viewpoint of a pupil as self-evaluator, the relationships in connection with a distributed leadership and a collaboration system, and an interchange of role taking, the reconstruction in connection with teachers' heuristic recognition, and self-awareness about spontaneous lesson studies.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
総計	6,300,000	1,890,000	8,190,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：(1) 教師 (2) 力量形成 (3) 授業研究 (4) 校内研修 (5) 授業の本質論
(6) 教育(カリキュラム)政策 (7) FD

1. 研究開始当初の背景

日本の学校教師文化として継承されてきた校内授業研究、すなわち教師による授業公開→第三者による授業参観→事後における

授業者・参観者による共同的な授業検討という展開で遂行される授業研究は、教師の力量形成が学校改善にとって喫緊の課題である
昨今、その意義が再認識されている。そのた

め、そうした授業研究を校内研修の一環として、どのようにデザインしていくかという点の検討が、現在、教科の授業論や教師教育論における重要なテーマとなっている。

こうした校内授業研究に関する先行研究は、主として、授業研究を軸とした校内研修システム——たとえば、公開授業の設定方法、授業事後検討会の運営法、種々の授業分析法の利用法、授業研究の成果の集約方法といった要素からなるシステム——をどう構想するかという点に焦点を合わせている。しかしながら、それらの先行研究には、いくつかの重要な研究視点の等閑視が見出せる。

第1は、校内研修としての授業研究に参加すべき、またそれを主体的に進めていくべき、教師個人々の力量形成の実態への着目という視点である（研究視点A）。教師の力量形成において、校内研修としての授業研究が重要な意味を持つことは疑い得ないものの、そうした授業研究への構えは、教師個人々がこれまでどのような実践経験を積み重ねてきたのか、その実践の履歴に応じて様々な様態を取り得る。したがって、研修システムとしての授業研究を構想する際、上記のようなシステムの構成要素にのみ着目しているのでは、十全な研修システム構成にはつながりにくいと考えられる。

第2は、授業研究が本来これまで担ってきた意義、すなわち授業の本質論的検討——授業という営みは子どもの学びにとって、さらには教師の学びにとってどういう意味を持つのか——という視点である（研究視点B）。校内研修の一環として授業を道具的に位置づける場合であっても、授業という営みを検討の対象とする以上、上記のような本質論的検討という研究視点を抜きにしては、成り立ちにくいと見なせる。

第3は、制度的実践としての授業の検討という視点である（研究視点C）。授業は、折々の教育制度や教育政策——たとえば研修等の教員政策や学力調査等の教育課程政策——の文脈の中で成立しているが故に、それらの影響を考慮せずして授業という営みの実相を検討することは困難であろう。しかしながら、先の校内授業研究に関する先行研究では、研修システム内に閉じた形で授業研究のデザインを検討するという意味で、この視点が弱いと言わざるをえない。

第4は、大学FD論との関連づけという視点である（研究視点D）。近年、FD研究、とりわけ大学授業公開とその検討にかかわる研究の進展は、著しいものがある。したがって、校種は違え同じ学校内における研修システムとしての授業研究について検討する際、授業論的にまた教師教育論的に近接領域という意味で、研究成果が蓄積されつつある大学FD論を積極的に参照しつつ、知見の接合

を試みるべきであろう。

以上要するに、学校教師の力量形成を志向した教科の授業研究のデザインを検討する場合、授業研究を軸とした校内研修システムにのみ焦点化するの、視点を狭く限定し過ぎることである。つまり、教師の力量形成を志向した授業研究のデザインのみの検討ではなく、このデザインの検討を含みつつ、上記のような諸視点をふまえた包括的な枠組みに基づきながら、そうした授業研究の方法論的な検討を行うことが求められる。

2. 研究の目的

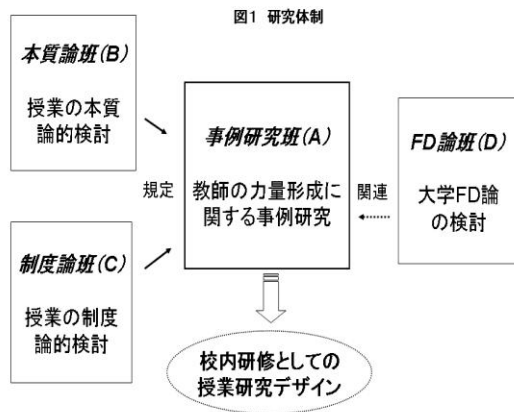
1で述べた背景を踏まえつつ、本研究では、①学校教師の力量形成にとって、学校内で遂行される教科の授業研究はどのような意味を持ちえるのか、②学校教師の力量形成に資する授業研究をどのようにデザインすべきか、という点に関する方法論的な検討を行うことが目的となる。

本研究のゴールは、上記目的②の校内授業研究のデザインに関する方法論的検討、すなわちそうしたデザインが即すべき諸観点の提起にある。ただし、目的②達成においては、1の背景で述べたように、目的①の研修対象となる授業という営みそのものの意味の検討——学びを促す活動としての授業、あるいは制度的実践としての授業という視点からの検討——や、研修としての授業研究に関する近接領域の知見の活用が求められることになる。つまり、本研究を通して、上記②を①の視点と関連づけながら、教師の力量形成に資する校内授業研デザインの方法論に関して包括的にアプローチするわけである。

3. 研究の方法

以上のような方法論的検討では、教師の力量形成を志向した校内授業研究のデザインにより直接的にかかわる上記研究視点A（教師個人々の力量形成の実態への着目）を主要因としながら、それへの規定要因として研究視点B（授業の本質論的検討）とC（制度的実践としての授業の検討）を位置づけつつ、関連要因として研究視点D（大学FD論との関連づけ）を布置するという枠組みが採られる。こうした研究枠組みに即せば、研修システムとしての授業研究事例を諸要因の関連のもとにより包括的に検討できることになる。

具体的には、本研究の共同分担体制を活かして、事例研究分担者が校内研修の参与観察や教師の力量形成を巡るインタビュー等に基づいた事例研究（研究視点A）を遂行する。同時に、授業の本質論的検討分担者（B）、授業の制度論的検討分担者（C）、FD論的検討分担者（D）が、それらテーマに関わった先行研究を検討しつつ、そこから得られた知見を通して、先の事例研究で得られた知見を相対化しながら



ら、校内授業研究のデザインが即すべき諸観点を提起する（図1参照）。

4. 研究成果

(1) 校内研修としての授業研究・教師の力量形成の実態に関する事例研究

まず、上記の共同研究体制における事例研究分担者によって行われた、3つのフィールドワークの結果とそこから得られた知見を示したい。

第1のフィールドワークは、教科の授業研究を軸とした校内研修に関わるアクションリサーチ（研究者が研究協力者である教師たちと協働的な関係のもとに実践の改善に取り組む試み）である（後掲5の学会発表等⑤参照）。この事例研究では、研究分担者がある中学校にスーパーバイザーとして関わり、校内授業研究会に参加しつつ、そこで得られた研究授業の観察記録、教師自身が書き起こした実践記録、校内授業研究の音声記録をデータとしながら、そうした校内研修としての授業研究が教師の授業観に与える影響について検討されている。その結果として、授業研究を通して生徒の学びの実相を深く解釈していくことが、教師の授業観の編み直しにとって重要な契機になるという知見が得られている（この点については5の雑誌論文⑥も参照）。

また、第2のフィールドワークは、初任期（採用後3年程度の期間）という教職ステージを視点とした力量形成に関する事例研究を目的とする（5の学会発表等①参照）。この事例研究では、1人の小学校教師を対象として、その授業のビデオに基づく再生刺激記録、教師自身が記したその授業の省察記録、および実践全般に関する包括的なインタビュー記録をデータとして、この授業の時点までに形成された授業力量の実態把握が試みられている。その結果、初任期の力量形成において、初任教师とメンタリング的な、あるいはコ・コーチング的な同僚教師との関係性

が、校内研修としての授業研究の場で、さらには日常的な教師間交流において有意に影響を与えるという知見が得られている。

さらに、第3のフィールドワークは、中堅期（教職歴10年程度）という教職ステージを視点とした力量形成に関する事例研究を目的とする（5の学会発表等②参照）。この事例研究では、1人の小学校教師を対象として、その教師の実践全般に関わった包括的なインタビュー記録と、インフォーマルな授業実践報告会の発言記録をデータとして、中堅期固有の学校における教師役割取得と授業力量形成の関係が検討されている。その結果、研究主任等、校内研修をコーディネートしていくような役割取得が、従来とは異なった視点からの自身の授業の理解や、研修を巡る同僚関係の調整能力形成といった、教師力量の拡張を促す要因となるという知見が示唆されている。

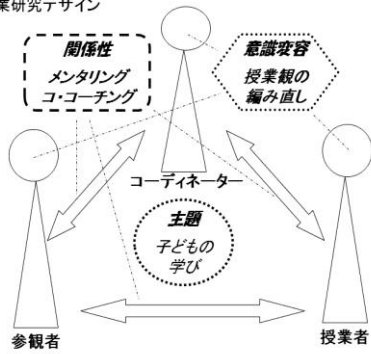
これら3つの事例研究から得られた知見を総合すれば、校内研修としての授業研究デザインにとって、鍵となる3つのカテゴリーを見出すことができる。

第1のカテゴリーは、授業研究の「主題」である。近年校内研修としての授業研究では、教師の技術ではなく、子どもの学びを検討の軸とすることの有意義性が主張されることが多い（たとえば、佐藤学『教師花伝書』小学館、2009年等を参照）。これについては、上記事例研究においても、その知見を通して確認できた点である。つまり、校内研修としての授業研究では、そこでの検討の主題を子どもの学びの事実に基づくという観点が求められるわけである。

第2のカテゴリーは、授業研究における「関係性」である。授業研究会への参加者には、基本的に、授業者、授業参観者、および会のコーディネーター（あるいはファシリテーター）という役割が見出せる。校内研修としての授業研究では、これら三者の関係性について、（授業者が初任教师の場合は）メンタリング的な関係、あるいはコ・コーチング的な関係を構築する、そうした関係構築の役割をコーディネーターが担うという観点が求められることになる。

第3のカテゴリーは、授業研究を通じた「意識変容」である。授業研究会は、それに参加した教師に多かれ少なかれ意識変容を促すものであるものの、とりわけ授業者である教師、さらにはコーディネーター役の教師にとっては、自身の授業を異なる視点から見るといった授業観の編み直しの契機となり得る。つまり、校内研修としての授業研究では、参加教師の授業観の編み直しという意識変容を志向するという観点が求められることになる（次ページ図2参照）。

図2 授業研究デザイン



(2) 授業の本質論・制度論・FD 論を視点とした上記事例研究の知見の相対化

以上、授業研究において対象化すべき子どもの学びという主題、授業研究の参加者に促されるべきメンタリング的、コ・コーチング的な関係性、授業研究が志向すべき意識変容としての授業観の編み直しという諸点からなる枠組みが、校内研修としての授業研究デザインの構築で求められることが示された。次に、研修対象となる授業という営みそのものの意味の検討——学びを促す活動としての授業、あるいは制度的実践としての授業という視点からの検討——や、研修としての授業研究に関する近接領域の知見の活用を通して、(1)の事例研究から得られた知見を相対化することを試みたい。

まず、上記の授業の本質論的検討から、以下のような2点の知見が得られている。

1つは、校内研修としての授業研究に参加する教師が得る発見的認識の重要性である。授業研究会における対話を通して参加者の、とりわけ授業者である教師の意識変容＝授業観の編み直しが生じるには、その前提として子どもの学びについて今までとは異なった見方が可能であるという発見が必要となる。つまり、授業とは子どもの発見の機会であるということ再認識し、言わば心が揺さぶられる体験を持つことで授業観の編み直しの可能性は開けるのであり、そうした前提条件を満たすような授業研究会における対話が求められることになる(5の学会発表等③参照)。

今1つは、検討すべき子どもの学びの方向性に関わる。授業研究会で子どもの学びを主題にするとしても、その学びを授業の目標である内容・能力の習得・獲得にのみ限定して捉えるならば、学びに関する深い解釈は困難であろう。仮にそうした学びの把握を学力志向と呼ぶならば、これに対して、自己と他者の問い直しに繋がっていく営みとして学びを把握する、教養志向の学びという観点を対置することができる。授業研究における子

もの学びの検討をより意味あるものにしていくには、教養志向の学び観が求められることになる(5の学会発表等④参照)。

また、上記の授業の制度論的検討からは、以下のような2点の知見が得られている。

1つは、研修コーディネーター役の教師が備えるべき資質の明確化の必要性である。上記のように、授業研究会に参加する教師の関係構築において、コーディネーター役は重要な役割を期待される。そうした役割を分析的に把握するため1つの手掛かりとして、米国におけるスクールリーダー資質向上のための基準(ISLLC)は——批判的な検討を要するものの——示唆的な情報源と見なせる。この基準から、たとえばコーディネーターは授業研究会の遂行のための責任を分散させる上でリーダーシップを発揮すべきこと(分散型リーダーシップ)、そのことを通して教師たちに授業研究のビジョンや目標への共通のコミットメントを形成していくこと(協働システム)、といった知見を汲み取ることができる(5の雑誌論文③参照)。

今1つは、授業研究の主題である子どもの学びの評価に関わる。上記のように、授業研究会では子どもの事実を深く解釈していくことが求められるものの、その解釈を行う教師の意識には制度的な学習評価枠組みが浸透していることが考えられる。そうした枠組みに絡め取られることなく、枠組み自体を脱構築しつつ子どもの学びを解釈していくための1つの手掛かりとして、現在議論が進んでいるイギリスでの学習評価制度改革は示唆的な情報源と見なせる。この改革では、たとえば子どもが授業の中で主体的に評価基準を作りだしていく役割を担う授業構成の課題が議論されている。こうした観点を意識すれば、授業において、子どもを被評価者ではなく、自律的な自己評価者と位置付ける見方が可能になり、この知見は子どもの学びの解釈の在り方に意味を持つと考えられる(5の雑誌論文④参照)。

さらに、上記のFD論の検討からは、以下のような2点の知見が得られている。

1つは、校内研修としてのフォーマルな授業研究から学校におけるインフォーマルな授業研究への自生的展開の重要性である。今日のFD論における重要な論点として、自生的FDの模索があり、大学教員が学生の成長を実感できるプログラムへ関与することを契機として、インフォーマルな自生的FDが生成してくる可能性が指摘されている。こうしたFD＝授業研究では、問題解決のための議論ではなく、問題発見のための対話が基調となる。この知見をアナログ的に援用した場合、校内研修としてのフォーマルな授業研究会が刺激となって、その参加者である教師たちに、インフォーマルな自生的授業研究を持

とうとする意識変容を促すことが望まれよう（5の雑誌論文⑬参照）。

今1つは、校内研修としての授業研究における役割取得の相互交換の活性化である。今日のFD論における重要な論点として、FD主体の大学教員を、研究の専門家だが教育の非熟達者と見なす専門家モデルと、研究と教育両者の専門家と見なす同僚モデルが対置されることが多いものの、両モデルの往還的な位相の下にFD主体としての大学教員を理解すべきだという指摘がある。この知見をアナロジカルに援用した場合、学校教師は教育者であるが研究（推進）者ではないという見方と、教育と研究両者の専門家であるという見方が採り得る。研修コーディネーター役の教師はより研究者的な立場取りを求められるものの、その教師もまた授業研究会における一参観者となり、さらに当然授業（公開）者にもなる。つまり、授業者、授業参観者、コーディネーターという役割を、相互に交換しつつ校内研修としての授業研究は遂行されるという点で、この役割取得の相互交換の活性化が授業研究会の充実にとって1つの鍵と考えられる（5の雑誌論文⑭参照）。

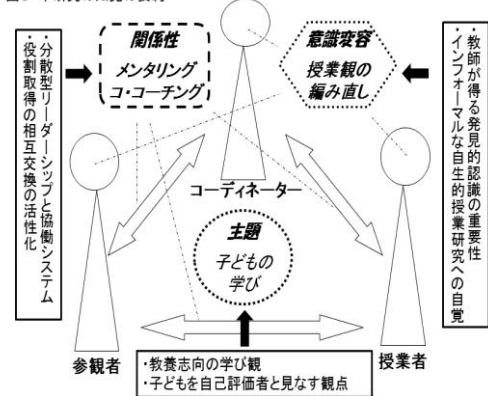
(3) 校内研修としての授業研究デザインが採るべき観点

これまで述べてきた本研究の知見を要約すると、以下のようになる（図3参照）。

教師の力量形成を志向した校内研修としての授業研究では、そこで対象化すべき子どもの学びという主題、授業研究の参加者に促されるべきメンタリング的、コ・コーチング的な関係性、授業研究が志向すべき意識変容としての授業観の編み直しという諸点からなる枠組みに基づいて、そのデザインを構想することができる。

子どもの学びという授業研究の主題については、教養志向の学び観、子どもを自律的な自己評価者と見なす観点と関連付けて理解する必要がある。また、授業研究への参加者の関係性については、分散型リーダーシップと協働システムという観点、役割取得の相互交換の活性化という観点と関連付けて理解する必要がある。さらに、授業研究が志向すべき意識変容としての授業観の編み直しについては、その前提としての教師が得る発見的認識の重要性という観点、インフォーマルな自生的授業研究への自覚の促進と関連付けて理解する必要がある。

図3 本研究の知見の要約



5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計64件）

- ① 藤原 頌、教師のためのやさしい授業研究入門⑪—授業研究と校内研修（1）、授業づくりネットワーク、査読無、24(2)、2011、50-51
- ② 藤原 頌、教師のためのやさしい授業研究入門⑫—授業研究と校内研修（2）、授業づくりネットワーク、査読無、24(3)、2011、50-51
- ③ 山崎 雄介、米国におけるスクールリーダーの資質向上—ISLLC 基準に示されるリーダー像、群馬大学教育実践研究、査読有、28、279-287、2011
<https://gair.media.gunma-u.ac.jp/dspace/handle/10087/5990>
- ④ 鋒山 泰弘、学習評価をめぐるイギリスの動向と日本の課題、追手門学院大学教職課程年報、査読無、19、21-28、2011
- ⑤ 藤原 頌、教師の実践的知識に関する研究動向—コネリーと克蘭ディニン（Connelly, F. M. and Clandinin, D. J.）の研究を中心に、兵庫県立大学看護学部・地域ケア開発研究所紀要、査読有、17、2010、131-144
- ⑥ 森脇 健夫、教師文化と「観」の変容、授業づくりネットワーク、査読無、23(10)、2010、4-7
- ⑦ 木原 成一郎、林楠、イングランドの現職教育に関する研究—リバプール・ジョン・モア大学のメンター資格認定に焦点化して、学校教育実践学研究、査読無、16、2010、89-100
<http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00029470>
- ⑧ 松崎 正治、観の変化が授業スタイルの変化を促す—荻原伸氏の授業スタイル、授

業づくりネットワーク、査読無、23(10)、2010、14-17

- ⑨ 吉永紀子、教師の力量形成と「変化」—遠藤隆宏氏の授業スタイル、授業づくりネットワーク、査読無、23(10)、2010、18-21
- ⑩ 山崎雄介、教育内容編成における教師の権利と子どもの発達保障、障害者問題研究、査読無、38(4)、2010、11-18
- ⑪ 森脇健夫、授業研究としての「アクションリサーチの試み」II—「感性と言語の対話」プロジェクトを通して、三重大学教育学部紀要、査読無、60、287-302、2009
<http://miuse.mie-u.ac.jp:8080/handle/10076/10614>
- ⑫ 杉原真晃、岡田佳子、新任教員 FD のための「基準枠組」の開発・構成と開発研究の可能性、国立教育政策研究所紀要、査読有、139、2010、49-61
- ⑬ 平山朋子、松下佳代、理学療法教育における自生的 FD 実践の検討—OSCE リフレクション法を契機として、京都大学高等教育研究、査読有、15、2009、15-26
<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/97918>
- ⑭ 杉原真晃、川島啓二、加藤かおり、岡田佳子、FD プログラムの開発を支援する—「新任教員 FD のための基準枠組」をツールとして、大学教育学会誌、査読無、31(2)、2009、71-74

[学会発表等] (計 11 件)

- ① 木原成一郎、体育授業における「若手教師」の思考の変化とそれを促した要因、教科教育理論研究会 (2011 年 3 月例会) 発表資料、2011 年 3 月 28 日、京都市
- ② 松崎正治、初任期から中堅期へ移行していく時期の教師の実践的力量形成過程の研究、教科教育理論研究会 (2011 年 3 月例会) 発表資料、2011 年 3 月 28 日、京都市
- ③ 村井淳志、教師バッシングはもうやめて!、教科教育理論研究会 (2011 年 3 月例会) 発表資料、2011 年 3 月 28 日、京都市
- ④ 松下良平、学力と教養をめぐる教育学のジレンマ—教養として教育へ、教科教育理論研究会 (2011 年 3 月例会) 発表資料、2011 年 3 月 28 日、京都市
- ⑤ 吉永紀子、教師の〈観〉の編み直しを支える授業研究、日本教育方法学会第 46 回大会発表資料、2010 年 10 月 9 日、東京都

[図書] (計 11 件)

- ① 松下良平 (共著)、大修館書店、佐伯胖

監修・渡部信一編『「学び」の認知科学事典』(分担箇所「学ぶことの二つの系譜」、pp. 21-38)、2010、全 607 ページ

- ② 鋒山泰弘、赤沢早人 (編著)、日本標準、『授業と評価をデザインする—社会』、2010、全 199 ページ
- ③ 松下佳代 (共著)、東北大学出版会、東北大学高等教育開発推進センター編『大学における「学びの転換』と学士課程教育の将来』(分担箇所「大学における「学びの転換」とは—unlearn 概念による検討」、pp. 5-15)、2010、全 169 ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤原 颯 (FUJIWARA AKIRA)
兵庫県立大学・看護学部・教授
研究者番号: 60261369

(2) 研究分担者

森脇 健夫 (MORIWAKI TAKEO)
三重大学・教育学部・教授
研究者番号: 20174469

木原 成一郎 (KIHARA SEIICHIRO)
広島大学・大学院教育学研究科 (研究院)・教授
研究者番号: 20214851

松崎 正治 (MATSUZAKI MASA HARU)
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号: 20219421

吉永 紀子 (YOSINAGA NORIKO)
福島大学・人間発達文化学類・准教授
研究者番号: 30344823

村井 淳志 (MURAI ATSUSHI)
金沢大学・人間社会学域学校教育学類・教授
研究者番号: 90219866

松下 良平 (MATSUSHITA RYOHEI)
金沢大学・人間社会学域学校教育学類・教授
研究者番号: 50209540

鋒山 泰弘 (HOKOYAMA YASUHIRO)
追手門学院大学・心理学部・教授
研究者番号: 30209217

山崎 雄介 (YAMAZAKI YUSUKE)
群馬大学・教育学部・准教授
研究者番号: 00252411

松下 佳代 (MATSUSHITA KAYO)
京都大学・高等教育研究開発推進センター・教授
研究者番号: 30222300

杉原 真晃 (SUGIHARA MASA AKI)
山形大学・基盤教育院・准教授
研究者番号: 30379028